



Libreria Editrice Vaticana, Città del Vaticanoの転載許可済
©1983 精道教育促進協会 (〒芦屋)三二・三四五二 芦屋市船戸町12-6

教皇様の叢

贖いの聖年

ゆるしの秘跡を中心にして

きょうは、和解の聖務についてあらゆる面から考えていただきたいと思えます。私たちが召されたのは、人類と神との和解を告げ知らせるためです。神ご自身と神のおことば、神の掟に対する感性を回復させる、つまり、行動の本当の規準である神のみ旨を受け入れるべきことを、再び人々に自覚させるために召されているのです。和解を告げ知らせるとは、人々に罪の意識を回復させることです。そうすることによって、今度は私たちが、経済、社会、歴史、文化、政治といった種々の分野での悪を見、人間の責任の根源はどこにあるかを知ることができるようでしょう。神から離れてしまった自分の状態を知ることができれば、兄弟姉妹、ひいては被造界全体と対立関係にある自分の姿にも気づくはずですよ。そうやってこそ、和解を告げ知らせるといふ努力も、効果的な平和への呼びかけになりうるのです。和解を告げ知らせるとは、神のゆるしとあわれみがいかに大きなものであるかを強調することです。罪を自覚するようになった世界に贖いを提供するとは、われらの望

みキリスト」の慈悲と希望(に関する啓示)を告げ知らせることです。

ゆるしの秘跡を最優先する

和解を告げるとは、とりわけ告解の秘跡を奨励すること、告解の秘跡の重要性を強調するということですが、そうするのは、この秘跡が回心とキリスト教的な生活の向上と社会の刷新に関係があるからです。いずれも罪のゆるしなくしては達成できません。

原罪と自罪は共に、悪の根源であって、社会に悪影響をおよぼすこと、また、善い悪、キリスト・サタンと、それぞれの間にたえない戦いが続いていることを指摘するのは私たちが司教の役割です。「死と生命との不思議なたたかい、いわゆる過ぎ越しの戦いに巻きこまれてはいるが、それと同時に、復活されたキリストに強められていることを知るには、人々にとって有益なことです。自己の生き方のなかに罪を認めることができなければ、和解の意味を理解することも、心を開いて悔悛とみずからの回心に向かうこともでき

ないのです。また、それができないということとは、社会の刷新に寄与することもできないことになり得ます。私たち自身の回心がなければ、息の長い社会の刷新は望むべくもないからです。ところで、この個人的な回心は、神のお定めによって、告解の秘跡と密接なつながりをもっていきます。

五年前のちょうど今月、パウロ六世聖下は、(…)先を見透していたかのように、回心の重要性および、回心と告解の秘跡との関係について強調されました。「我々の使徒的役務が目的とするのは回心である。絶えることのない悲劇的な現実である罪と、罪の個人的社会的次元、それに、罪の増したところには、それ以上の恩寵がふれるばかりのものとなつた(ローマ5・20)」という事実を人々に自覚させなければならぬ。聖下のこの切なる希望はこんにちそのまま私の望みでもあります。前任者のことばは、米国および世界中の教会に今も、そのままあてはまります。そこで私は同じことを今日、牧者であるみなさんの熱意と責任に委ねたいと思えます。司教方が司祭を励まし、告解の秘跡をたくに優先するように働きかけて欲しい、これがパウロ六世聖下のたつての願いでした。「回心という仕事を実現するに当たり、告解の秘跡を通して、しっかりと救い主に協力できるわけですが、この点を十分に理解してくださいれば、司祭方もより一層熱心にこの秘跡のために働いてくださることでしよう。もっと大勢の司祭が信者のみなさんの必要に応じてくださると思うのです。仕事によっては、時間の都合もあり、延期したり、あきらめたりする必要があるのでしようが、告白を聴く仕事はそういうわけにはいきません。罪人を探し出し、御父への愛に立ち返らせる、これが私たち司教、司祭の務めなのです。(…)一人ひとりに赦しを与え、一人ひとりと和解される救い主イエズス・キリストご自身に、信者の方々

注意をひきつけるよう努めましょう。御父に光栄を帰するため、御子イエズスの血は私たちの罪をすべて清める(ヨハネ①・7)という偉大な真理を人々にわかってもらうよう努力したいものです。兄弟のみなさん、個別告解において慈しみ深い神と一対一で出会うことがいかにねうちのあるものか、幾度も繰り返して強調してください。

新教会法と一般赦免

パウロ六世教皇はニューヨークの司教方と会った際、一般赦免とその適用についても話しておられました。教会全体の経験を省みると、司教面での警戒を怠ってはならないことがわかります。新教会法は、一般赦免はあくまで例外的な方法であるとし、これまでの教えを繰り返しています。大きな祝日や巡礼で集う会衆が数多いという理由だけでは、一般赦免を認めることはできないのです。

和解を告げるとは、告解の秘跡の重要性を強調するということですが、そうするのは、この秘跡が回心とキリスト教的な生活の向上と社会の刷新に関係があるからです。いずれも、罪の赦しなしには達成できないのです。

この規定、さらに、子供の初告解に関する規定を正しく理解し、適用して下さるようお願いいたします。告解の秘跡にみられるキリストの愛は比類のない宝ですから、子供たちを

もこの秘跡に導いてやる必要があります。親と教師、司祭は辛抱強く努力を重ね、子供にこの秘跡にあずかるための準備をさせなければなりません。このような努力こそ教会全体にとってすこぶる重要なのです。

贖いの聖年にあたり、司牧計画全体はゆるしの秘跡を中心にして、具体的に手をうって実行に移していただきたいと思えます。具体的なものとしては、新たな意欲で要理教育に努力することもふくまれるでしょう。そうすれば、告解の秘跡は、老若男女を問わず人々

家族と家庭について

家庭の使命

■家庭は福音の種子を蒔くべき第一の畑です。両親と子供は家庭内の生きた細胞です。家庭の中でキリスト教的理想を自分のものとして、神と兄弟に仕えることを学んでいくのです。(一九七九・一・一五)

■両親は子供の人間的成長にとりわけ配慮すべきです。子供の前で中立の態度を保ったり、個性の尊重という口実のもとに、好きなようにさせればよいと考えたりすれば、それこそ無関心な態度だと言うほかはありません。(一九七九・五・二三)

■信仰教育は、子供の幼い頃から親が与えるべき教育ですが、それは家族のメンバーが信仰をますために互いに助け合うときに始まります。福音の教えに従って日々、目立たぬ自然なかたちで、辛抱よくキリスト教的な生き方を実行するなら、すでに信仰教育を始めていることになるのです。家族内の出来事、

の生活の中心部分になると思われます。(…) 聴罪師がいて告解の秘跡を受けうることを、小教区報など種々の方法で、はっきりと知らせれば、信者の方々を秘跡へ向かわせることができるでしょう。神の恩寵の働きを受けて、この秘跡を受けたいという望みや、受けねばならぬという必要を、大勢の人々はすでに心に感じているからです。信者の方々を、努めて神と教会との和解へ招くのは、私たちの司祭職、使徒職に合致した仕事です。私たちは牧者として、みずからの弱さと罪を謙遜に自

例えば秘跡を受けるときや、典礼上の大祝日、誕生日や命日などは、キリスト教的観点からそれぞれのことからの中味を説明するのにすこぶる適したときだと思います。(一九七九・十・十六)

■信仰についての主要な真理は、愛情と尊敬に満ちた家族生活を通して、伝わっていくわけですが、そのおかげで、子供の一生の間に役立つような、決定的な影響を与えることができるでしょう。(一九七九・十・十六)

■今日、家族が示すべき全ての価値、つまり愛情、奉獻、犠牲、貞潔、生命の尊重、仕事、平穩、喜びなどを、本当に理解するための鍵は聖家族です。(一九七九・十二・二十二)

家庭の使徒職

■あなたの家庭は常に祈りの場…毎日家族と一緒に祈る家庭であらねばなりません。(一九七九・十・一)

覚しなければなりません。神のいつくしみ深いご計画によって、信者を悔悛と回心へと導くがし導く権能と義務をも与えられています。(…) 聖年は、「主の祈り」のゆたかな中味をよく考えるに適したときです。「我らが人に赦すごとく、我らの罪を赦したまえ」は和解の祈りです。和解の役割に従事するについては、神への立ち直りのもつ二つの面に注目しましょう。一つは、和解へと歩み寄ってくださる神、も

あります。効果的で賢明な家庭司牧がなされているところでは、生命を神の贈り物として受け容れるのと同じく、神の呼びかけを容易にききわけ、おしみなない心でその呼びかけに応えることができるでしょう。(一九七九・五・十五)

■親であるみなさんをお願いします。自分の子供のなから司祭や修道者への召しだしが数多く出てくるよう、ぜひ努力を傾けてください。また、自分の家族・子供たちへのなから、キリストの選びをうけて、全てをおいてキリストに従うよう召される人がでるとい

■夫婦のみなさん、キリスト教的な家庭とはどういうものかについてのあなたがたの確信と経験は、それぞれの国ですすめられている教会の家庭司牧にとって大きな利益となるでしょう。この分野で現に行なわれていることや行なうべきことに、それぞれの可能性に従ってぜひ力を貸してください。夫婦愛について、子供や家庭教育についての神のすばらしい計画を、若い世代の眼に輝かしいものとして映るようになければなりません。とこ

社会における家庭の使命

■人工的避妊が普及すれば、墮胎が容易にひらかってしまいます。避妊も墮胎も、子供に対する恐れと生命の排除、それに、神が本質的に望みになった男女の一致とその結果とを尊ぶ心がなくなるといふ傾向と、同じレベルの問題ではありませんが、同じ線上にあることはたしかです。ところが、これらの問題

一つは、悔悛と回心で応える人間です。悔悛と回心が、大変な努力を要求するだけでなく、時には非常に苦しいものであることについては、疑いの余地はありません。たしかに、神のおことばは厳しく、人間の力以上を要求し、謙遜で忍耐強い祈りを求めるので、どうか、そのようなときも、キリストの恩寵の無限の力を過少評価したり、福音の要求を勝手に変えたりすることはできないのです。(一九八三・四・十五 米国司教団へ)

ろで、それは信仰によって生きる人の生きた証を通してしか実現できません。(一九七九・九・十七)

■家庭は、社会と教会という織物の一本目の糸です。(一九七九・五・五)

■明日の社会の不幸は家庭次第です。(一九七九・十二・二十二)

■受胎の瞬間に始まる人命が神聖なものであることを何をしても大切にしてください。(一九七九・十・一)

■夫婦には生まれくる子どもの存在を受け容れ守る責任があり、生命を除去する権利などありはしないのです。この点について、社会、医師、立法者などはたとえ困難ではあっても、人命尊重の観点から、親の責任が果たされるよう助ける義務があり、また、極端に難しい場合にも手助けをしなければなりません。(一九七九・一・三一)

■生命を尊ぶ

■人工的避妊が普及すれば、墮胎が容易にひらかってしまいます。避妊も墮胎も、子供に対する恐れと生命の排除、それに、神が本質的に望みになった男女の一致とその結果とを尊ぶ心がなくなるといふ傾向と、同じレベルの問題ではありませんが、同じ線上にあることはたしかです。ところが、これらの問題

説教・講話・書簡等の抄記

に深く取り組んでいる人々はよくご存知のことですが、実際には反対の考え、意見が広く流布され、信じられています。
(一九七九・十一・三)

子供の権利

■子どもが厄介なもの扱いされたり、あるいは自己愛満足的手段と考えられたりしています。子ども一人ひとりには唯一無二の神の贈り物であり、子供は愛のうちに一致している家庭に生まれ育つ権利を有していますと。
(一九七九・十・七)

■人間はその受胎の瞬間から愛され待たれている存在、唯一無二の存在であり、特別の価値あるものとして生まれ受け容れられるべきです。そして大切で役立つ存在であると感じ、愛され、ねうちを認められる権利が子供にはあるのです。万一、不具であったり障害を持っているとしたらなおのこと一層愛されていることを感じる事ができるように努めなければなりません。
(一九七九・一・三)

母性のねうち

■母であること、それは人間的な面からみて偉大なこと、輝かしいこと、根本的に大切なことです。
(一九七九・一・十)

■若い女性みなさんに思い出していたきたい。母になるといふこと、つまり母性は女性の召し出しです。昨日も今日もいつも、つまり永遠に変わらぬ召し出しなのです。
(一九七九・一・三)

■母親と、それに若い男女に申しあげたい。仕事をもち、仕事で成功を収めることは、生命を生みだし、育むことよりも一層重要な、という人々には決して耳を貸さないでください。
(一九七九・十・一)

■この輝かしく尊い召し出しが、新しい世代の人々の心の中で、大切にされるようあらゆ

る手をうたねばなりません。私たちが生きる家庭、社会、文明の中で、法律、仕事出版、生活文化、教育、学問の分野で、女性として母親としての權威が軽んじられることのないように。どの分野においても、例外なく、これこそ最も根本的な基準だからです。
(一九七九・一・十)

■母性については、政治や労働問題においても大きな目的、大きな責務として、とくに取

世界代表司教会議(シノドス)

教会の使命における 和解と悔悛

世界代表司教会議が、「教会の使命における和解と悔悛」というテーマで、ほかでもない贖いの聖年に開かれることに私は神のみ摂理の配慮をうかがい知ることができました。

世界代表司教会議のテーマと目的は、こうして贖いの深い意味および贖いの聖年の目的に、完全に合ったものになりました。救い主イエズス・キリストのご死去を記念する聖年は、すべての時代の主である神がみ摂理により、私たちにお与えになった特別の機会であって、私たちがキリストの贖いのみりを受け入れる義務を果たすためであります。

「さあ、今こそ恵みをいただく時、さあ今こそ救いの日。」(コリント②⑥・②) 贖いの聖年はこのように救いの特別の時であり、悔い改めと刷新への呼びかけであります。それゆえ、聖年は教会とキリスト者との生活全体に刻印を残したいのです。聖年は、決意も新たに、真理を行ない、正義を促進する愛に成熟する時であるからです。(…)

「和解」とは、明らかに、御父が御子の死去とご復活のうちにすべての人に提供して

りあげて扱われるべきことです。事実それは、母親の出産、養育、教育という誰も代わり得ない仕事と関係があります。家のなかでつねに見つけることのできる母親の心というものは何物をもつてもかえることはできません。本当に仕事を尊ぶのであれば、当然、母性を尊重するはずで、そして、これこそ、社会の道徳的健全度の決め手なのです。
(一九七九・六・六)

くださった贖いのことを意味しています。そして今も、御父は罪人すべてに贖いを与えておいでになります。放蕩息子のたとえ話にてでる父

親のように、人々が回心し悔い改めて、ご自分に立ち返るのを待ち続けておられます。今年の世界代表司教会議の任務は、使徒聖パウロが宣言した使命の偉大さに気づくことです。「神はキリストによって、私たちをご自分と和解させ、人々を和解に導く役目を私たちに委ねられた。(…)キリストによって切に願う、神と和解してとどまれ。」(コリント②⑤・18、20)(…)

世界を分裂させ、傷つける倫理悪の根源は罪です。かくして、人間生活全体は、善と悪との戦い、往々にして劇的な戦いである、と考えられるのです。悪の根が除去されなければ、ほんとうの和解を遂げることはできません。ですから、おのおのの神への回心は、同時に、社会を恒久的に刷新するための最善の道なのです。悔い改めによって実現する神との本當の和解ひとつひとつには、個人的な面と共に、社会的な面が含まれているからです。(…)

贖いの聖年で確保したい目的の一つは、教会の秘跡生活がもつ刷新力を、真剣に体験すること、万一必要ならば、その刷新力を再発

■子供を待っている母親はたびたび精神面で大きな試みに会います。母になるといふ偉大で神秘的な出来事を前にすれば、多くの女性は苦しみと疑問、誘惑におそわれます。胎内で芽生えた生命を受け容れようとすれば、数多くの困難や恐れを乗り越えなければなりませんから、それができるために神をかたく信じ、また生まれくる子供を信頼しなければなりません。
(一九七九・一・三)

見することです。そこで、司教職における親愛なる兄弟みなさん、私たちは全員、秘跡に関して、これまで以上の適切な努力を示し、かつ実行に移すよう、特別な努力をしなければなりません。

これにはゆるしの秘跡に対して特別な注意を払うことが含まれるはずで、ちなみにこの秘跡は今秋行なわれる世界代表司教会議のテーマであります。和解の名に値する実り多い和解を果たすために、よい準備をするよう勧めることです。和解があればこそ、神の恩寵が一人ひとりに届くからです。回心し、霊的に進歩するために、告解をしのぐ手段はありません。罪で破られた神との契約は告解のおかげで回復されます。ふつうの場合、伝統的に「免償」と称される聖性とゆるしの手段を得るために告解の秘跡は必要な条件なのです。

ですから私は、教区における司牧活動に関して申しあげたことを繰り返します。すなわち、神感覚と非常に密接な関連をもつ罪の意識を取りもどすよう努力してください。犯した罪を悔やむ気持ちを入れた心で起すのに役立つならば、利用できる手段はどれでも使わなければなりません。それには、信仰教育やしばしば回心の祭儀を行なうこと、さらに、主要な教会にはいつでも司祭がいて、だれもが赦しの秘跡を受けることができるようにすることなどがふくまれます。

(シノドス作業文書抄)

不変の教え

観想修道女たちへ

本日この場にはおいでになりませんが、観想修道女のみなさんは使徒職面で大変重要な役割をなさっておられることをあらためて確認したいと思えます。世間を離れて孤独のうちにより深い祈りに従事する生活に自分をさげるといふことは、キリストの復活の秘義を身をもって体験し、それを人々に示すことにほかならず、それはとりもなおさず、使徒の働きをすることなのです。

観想修道女がまわりの人々から孤立し、世界や教会とは無縁の人々であると考えらるならそれは間違いです。それどころかむしろ修道女はキリストの愛のうちに人々をより身近に保っています。(『教会憲章』46参照) ですから、新たにできた教会の司教が使徒的活動に直接従事する人が足りないにもかかわらず、この上ない恩寵である観想修道会を要請するのは当然のことです。

観想生活を送る修道女のみなさん、召しだしを大切にしてください。平和を見失ってしまった世界において、今日ほどみなさんの召しだしが重要なときはないでしょう。私教皇と教会はみなさんを必要としています。キリスト者はみなさんの忠実を頼りにしているのです。

個人主義と仲間割れ

ときには人々のためにみずからを献げ、自分の活動を放棄して、一層限定された共同体を造り、その地域の貧しい人々のさしせまった必要をみたしていかねばならないでしょう。貧しい人々のそばにいたいと願うみなさんの熱意はよく知っておりますし、みなさんのご努力には感謝しております。しかし、このあいだサオ・パウロの修道者にお話したように、修道者としてこれまでとは違った形のあり方

について考えるために、いくつかの点を思いだしていただきたいと思うのです。

まず第一に、こういった試みは常に祈りのうちになされなければなりません。たえず神の現存を保ち、神の暖かい愛に満たされた魂は、個人主義におちいつたり、姉妹との対立をひきおこすような危険からうまく逃れることができます。そのような人々なら、福音の教えに照らされて、貧しい人々や人間の傲慢さの犠牲になった人々のために働く道を選ぶにしても、社会的政治的に急進的な動きをすることはしないでしよう。過激な傾向は遅かれ早かれ、所期の目的に反する結果を生みだし、別の形の抑圧を生じさせたりするものです。最後に、神との親しさを保つ人であれば、人々に近づき、人々の生活環境の中に入り込み、同化する

方法を見つけて、それができるでしょう。しかも、修道者としての主体性を失うこととなく、貧しく、貞潔で、従順なキリストに従う道、すなわち、すばらしい召しだしを隠したり偽ったりすることもありません。さらに、これらの活動に先立って、修道院内でたえず話し合い、関係司教の協力を得て、責任を負うべき上長と共に、真剣に研究を続けなければなりません。このようにして、成功の見通しを充分検討した上で、計画を実行に移すのです。(ルカ14・28参照) 危険をおかしてはなりません。同時に、早急に必要とされる事柄に答え、かつその修道会の精神に一致したものでなければなりません。

結びにあたり、次の点をつけ加えたいと思います。このような試みには、つねに教会のハイエラキーとの一致のうちに、謙遜かつ勇氣ある態度で、必要ならば延期したり、ある

愛するみなさん

いは、よりいっそう適切な形に適應させたりする用意がなければなりません。(一九八三・五・十三)

お告げと聖霊降臨

1 「主の霊は、宇宙を満たした、アレルヤノ」(知恵の書1・7)

この喜びにあふれた歌声が、きょう、贖いの特別聖年に救いを受けた全ての人々の心から湧き起こります。神の霊は、私たちの霊魂に新たな生命をそそぎ、救いの歴史に新たな力をお与えになりました。「そして、復活祭の喜びに満たされた人類は、世界中で歓喜の声をあげるのです」(復活祭の叙唱1)

神の御母処女マリアは、神の霊が人間のなかで何をなさるかを示すこの上ない証人でありました。

な面を新たにし、新世界における「生ける石」にしてくださるのです。贖い主の恩寵を前もって受けて、マリアは神の要求と聖霊の働きかけにことごとく、忠実・従順に、お応えになりました。マリアは謙遜な侍女として、貞潔そのものである自分自身をことごとく主にささげ、思いやり深い姉妹として、人々の求めの声に耳を傾けました。また、母としてのマリアは余すところなく自分のすべてを御子、救い主の使命遂行のためにささげました。こうしてマリアは神の完璧な弟子となり、罪を取りのぞき、人間を父なる神に和解させるひとつの犠牲に協力したのです。聖霊はマリアのために信仰の暗闇を徐々に明るく照らし、御子キリストのことばの一つひとつと行ないに光明を投げ、カルワリオの苦しみと至上の

奉獻に際してもマリアに力を与え支えてくださいました。そして、十字架にかけられたのちには、御子の栄光にマリアをあずからせたのです。

2 以上のようなわけで、聖霊降臨と言え、十二使徒の教会と全ての時代の教会において、祈る存在、つまり、教会内に現存なさる聖母マリアのことを思いだします。一信者として、しかし、信者の母ですから信者のうち第一の者として、マリアは人々の祈りの支えとなり、十二使徒を始め他の弟子たちと声を合わせて聖霊のたまものをねがいます。ところでその聖霊こそ、お告げにあたってマリアを覆い、神の母となされた御方でした。

お告げと聖霊降臨、この二つの瞬間は教会において神秘的に永続しています。ナザレトのできごとと高間で起こったことは、毎日、世界中の全ての祭壇の上でくり返されているのです。だから、主の霊は、宇宙を満たした」といふのです。

3 みなさん、以上が聖霊降臨にあたって心に浮かぶ思いであります。この歴史的な大聖堂広場に集う私たちを、「マドニーナ」(マリア様)がみまもってくださいます。(…)この建造物はミランの文化と人々の信仰の象徴ですが、これを見てみると、ロンバルディア首都にまつわる思い出と感動がよみがえってきます。私はいろいろな目的で何度もこの地を訪れました。偉大な司教アンブロジウスの時代からキリスト教を深く深く生きてきたこの町のことを、知らないなどとは言えません。聖アウグスティヌスは「このミランで信仰への最初の招きを聴き、また、人ぞ知る司教と要理教育を始めました。」

さらに私がこうやって皆さんの中に立つことになったのは個人的な理由があるのです。私の名前はカロールですが、両親はこの洗礼名を与えて、私を聖カロール・ポロメオの保護に委ねたのです。(一九八三・五・二十二)

『教皇様の声』ヨハネ・パウロ二世教皇の説教・書簡・講話などを解説なしにそのまま伝える月刊紙。毎月 十日発行。定価 一部六十円送料六十円。一年予約七百二十円送料七百二十円。二十部以上の一括購入なら送料不要。

郵便振替 神戸 3-72393